

は、撒馬兒罕の市民の口から聞いて、クラビーホの書きとめて居ることである、要するに支那の富貴強大は普ねく此の地方に喧傳せられて居つたので、帖木兒も之を征伐するについては充分慎重な態度をとつたものと思はれる、このことは次に記する様に愈々彼が出軍した際に、残りなく證明せられてある、これ迄屢々征伐の機會を逸したのも、他に事情あつたとはいへ、此の考がまた大に關係したのであらふ、しかしながら元來彼には一箇の理想がある、それは從來能く知られて居ることで、彼が曾て蒙古の英雄成吉思汗によつて成された大事業を再現し、蒙古族の遺圖を繼承するといふ理想であつて、此のことは彼自身の言動について明らかに指摘し得ることである、それで此の理想の爲には是非共強大な支那の勢を挫かねばならぬのであつた。

かくて永樂二年明使が上の如き待遇を受けて居る時、即ち一四〇四年の秋に於て、帖木兒は一族諸將を會して盛筵を張り、諸子の婚儀を披露し、續いて大會議を催ほして、こゝに支那征伐の企を公やけにし、その是非の意見を聞いた處が、諸士皆之に賛成して、愈々東征は確定した、實に五年間程を西征にすごして漸やく都に歸つたばかりの時である、或は永樂帝からの此の使は、帖木兒の決心を早めたものであつたかも知れない、それにしても時機さへ許さば直ちに支那を征伐しやうといふ彼の前々からの覺悟は、此の際にも窺ひ知ることが出来るであらふ、戰勝記にはこの會議の模様を詳述して居る、「神明の冥助により、吾等は亞細亞を平らげ、世界の大きな諸王を服屬させた、古來かゝる大なる領土、權勢、軍隊及び命令を司どるものは稀である、しかし今日に至る迄に吾等の犯した罪惡は決して少々でないから、その罪亡ぼしの爲に善行をなし、異教徒を討つてその國を倒さねばならぬ、それで今支那の偶像教徒を征伐しやふと思ふが、これは非常に強大な勢力を持たねば望む可らざることである、よつて今